

コッレ・ダンギーゼにあるアルベルゴ・ディフーゾ「ラ・ピアーナ・デイ・ムリーニ」の敷地内の花の多さに「天国か?」と何度も呟きました。

ホテル? 民泊?
いえいえ、
アルベルゴ・ディフーゾです。
土地を感じて、
味わい、人と触れ合う、
こんな宿泊施設が
イタリアにありました。

Benvenuto!



うちの村が ホテルだよ

南イタリア、
アルベルゴ・ディフーズ
滞在記

文=成井昭人 text: Akito inui 写真=今津聡子 photographs: Satoko Imazu
coordination: Mari Ohta

*Benvenuto nel mio
villaggio!*



陽気で楽しい「ラ・ピアーナ・デイ・ムリーニ」オーナーのミケーレさんが、お出迎えをしてくれます。

自然豊かなモリーゼ州、ミケーレさんの宿の部屋から望める、のどかな風景。



土地の食材を使った料理は新鮮で美味しいものばかりです(コッレ・ダンキーゼ)。



歩いているだけで、楽しくなってくる町並み(ロコロンド)。



アルベルゴ・ディフーズ提携のレストランは気立ての良い人ばかりです(ロコロンド)。



人間はどこにでも住んでしまうのだな、と驚くばかり(マテーラ)。

アルベルゴ・ ディフーズ?

「アルベルゴ・ディフーズ」、声に出してみると舌がこんがりそうなの言葉は、いったいなんでしょう? これはイタリア語で、「アルベルゴ」＝「宿」、「ディフーズ」＝「分散した」という意味なのです。つまり「分散した宿」ということになるのですが……。ますますこんがらがってきてしまいます。

簡単にいってしまうと、アルベルゴ・ディフーズは宿泊施設です。しかし一般的なホテルとは違います。町や村、その集落の中にレセプションがあって、泊まる場所や食堂が他の場所に点在しているりもします。また大都市や観光地ではない地にあることが多いのも特徴です。アルベルゴ・ディフーズは、1980年、廃村の危機にある小さな村を再生させるという考えのもとに生まれ、1995年、サルデーニャ島ではじめのアルベルゴ・ディフーズができたそうです。

このように村の再生という考えがあるので、アルベルゴ・ディフーズを経営している方々は、その土地の文化や歴史を大切にしています。景観はもちろんのこと、提供される食事はその土地で採れたものを再生して使用しています。細部にまでこだわったこだわりがあるので、宿泊した我々は土地の風土を直に感じることができるのです。

マテーラのアルベルゴ・ディフーズのマネージャーが、「ホテルは縦に高くなっていくけれど、アルベルゴ・ディフーズは横に広がっていく」と語っていたのが印象的でした。つまり、その土地や住む人とのつながりが重要になってくるのです。ですから村が廃れてしまっているけど、アルベルゴ・ディフーズができることで、集落が生き返っていくのです。

このように考えると少し堅苦しくなってきましたが、そんなことはまったくありません。訪れたら、土地を大いに満喫し、住む人々との交流を楽しみましょう。きっとアルベルゴ・ディフーズの素晴らしさを知ることができるはず。

La Piana dei Mulini COLLE D'ANCHISE

ミケレさんがお待ちかね

最初に訪れたアルベルゴ・ディフーズは、モリーゼ州のコッレ・ダンキエーゼという村にありました。「モリーゼ州? どこ?」と思う方もいるかもしれませんが、モリーゼはイタリアでも2番目に小さい州で、長靴の形をした真ん中より少し下にあります。

モリーゼ州に入り、車を走らせていると、強い太陽の光が大地を照らし、草原が広がりはじめました。左右を見渡せば丘陵があつて、牛や馬がいます。のんびりした風景を眺めながらしばらくすると、目的のアルベルゴ・ディフーズ『ラ・ピアーナ・デイ・ムリーニ』が見えてきました。

敷地内には石造りの長い建物があり、そこにレセプションと食堂があり、奥のほうが部屋になっているようです。川が流れていて、橋から覗くとアヒルが泳いでいました。なんとものどかな風景です。ここ昔は水力発電所だったそうで、廃墟となっていた建物を修復し、アルベルゴ・ディフーズにしたそうで、建物の中には、発電機があつたりするので、その名残が垣間見られます。

レセプションではオーナーのミケレさんが出迎えてくれ、ウエルカムドリンクを出してくれました。陽気で楽しい方なので、すぐに仲良くなれそうです。するとミケレさんが、近くにローマ時代の遺跡があるから、日が暮れる前に行ってみないか? と尋ねてきました。もちろん行ってみ



上/水力発電の施設だったところを改修した、ユニークなアルベルゴ・ディフーズ。横長の建物にレセプション、食堂、客室が入っている。
下/朝は、地元産のハムに野菜にジャム、美味しいったらありません。

小さな小屋で、夫婦でずっと一緒にカチョカパッコーズを作っています。



コッレ・ダシキーゼ散歩

PM 5:00

ナポリから車で2時間ほど
歩いて到着。ミケーレさんが出迎えてくれました。



ローマ時代の浴場跡。いい汗流してたんでしょね。



PM 6:00

近くの
セビーノ村へ。
知られざる
ローマ遺跡も見学

遺跡の番犬？ と思っ
たらやさしい犬でした。

PM 9:00

宿のレストランで
食事。ミケーレさんが
ワインをどんどん
注いでくれます...



イタリアには無数にパスタがあるそう。



AM 7:00

鳥のさえずりで
目が覚めまは。
朝の散歩が
気持ちいい。

釣り人がいました。釣れてはいません。

AM 9:00

ミケーレさんの案内で
隣の村へ。
ランチで食べる
チーズもチーズ工房で
買いまは。



ポンッと出てくるモッツアレラチーズ。



アヒルの餌やりの時間、餌の入ったバケツを降ろすミケーレさん。



モリーゼ州の食材を使った絶品パスタ。

のチーズがあると、ミケーレさんに車で連れて
行ってもらいました。そこは小さな小屋で、老夫
婦が代々変わらぬ方法でチーズを作っていて、こ
の土地に住む人の豊かさを見た気がしました。
とにかくオーナーであるミケーレさんの至れり
尽くせりに感動しつつ、人、食、自然、文化、す
べてが詰まっているのがアルベルゴ・ディフゾ
なのだと思います。

ましよう。ミケーレさんの運転する車に先導され
て20分、セビーノというローマ遺跡に着きました。
なんとこの遺跡の敷地内に人が住んでいて、現在
草木が生えているところも、掘り返してみれば、
まだまだ遺跡が出てくるそうです。観光地化に侵
されることなく、歴史を直に感じる事ができる
贅沢な遺跡でした。
宿に戻って、ミケーレさんと一緒に夕食を食べ

ました。もちろんワインも食材も周辺で造られた
もの、採れたもので、とにかく何もかもが美味し
い。顔がほころんでしまいます。するとミケーレ
さんが得意顔で微笑みかえしてきました。その笑
顔からは地元の誇りを感じることができました。
その日は、レストランの横にあるホールで、地元
の女の子の18歳を祝うパーティが行われていて、
おしゃれをした人が集まってきていました。やは

りココは地元で愛されている場所なのだと深く思
いました。
翌日は、ミケーレさんと一緒に朝食を食べまし
た。地元のサラミやハム、そしてチーズが美味し
いこと、朝から感動ものです。その後、敷地内を
散歩しました。とにかく自然豊かな場所で、川の
対岸には釣り人の姿も見えました。
その後、近くの村に美味しいカチョカヴァアッコ



部屋の外の共有スペースで、エスプレッソを飲みながらのんびりするの楽しい。



簡素だけど雰囲気のある部屋、水の流れる音や鳥の鳴き声が聞こえてきます。



セビーノのローマ遺跡を眺めながら、信じられないくらい繁栄したローマ時代を想う。

Sextantio Le Grotte della Civita MATERA

マテラ、かつては洞窟住居だったところに家が増殖し、なんともいえない風景になっています。

おとろぎの景色

次はバジリカータ州のマテラへ向かいます。なんとなく写真で知っていたマテラではありませんでしたが、夕方に到着して、目の前に突然広がった景色を見たとき、驚愕してしまいました。「なんだここ」と心の底から声が出てきました。

断崖絶壁に建物が密集し、薄暗いライトで輝いていました。なんとも幻想的で、時間や時代がぐるぐる回っていきよかったです。ここには何千年も前、山の斜面の石灰岩を削った洞窟住居がありました。その穴は現在も残っていて、ここにある「セクスタンティオ・レ・グロッテ・デッラ・チヴィタ」も洞窟住居を修復、改装したアルベルゴ・ディ・フーズで、レセプションも洞窟です。

鍵は大きくて重たい鉄製でした。それを持って、いよいよ洞窟の部屋へ向かいます。中に入ると口ウソクの炎が揺れていて、中世を舞台にしたゲームやドラマの世界に入り込んだような気分になってきました。とにかく異世界に飛び込んだような感じがします。奥に進むとドラゴンや杖をついた魔法使いが出てきそつなのです。ひとまず荷を解いて、部屋にあった紅茶を飲んでみると、ロウソクや部屋の雰囲気も相まって、自分が単なるおっさんだということを忘れ、おとろぎの登場人物のような気分になってきました。恥ずかしいような楽しいような感じでした。

マテラ散歩

PM 7:00

コッレ・ダシキーゼからマテラまでは、3時間半ほどのドライブでした。



思わず声が出る景色でした。世界は広いです。

AM 8:00

光の透らない洞窟にいると時間の感覚がなくなります。鳥の鳴き声が目覚ましに。



スタッフのみなさんはいつも楽しそう。

AM 9:00



朝食。ビュッフェスタイルで料理がどれも美味しい。

洞窟をかたどった名物のパン。

AM 11:00

階段と坂を駆けのり、マテラの街を上へ下へと散歩しました。



マテラでは三輪タクシーを多く見かけます。



左／朝食。こんなに美味しいブッファタチーズはこれまで食べたことがありません。
右／食堂スペースは、元々は教会だったそう。

夕飯を食べに行ったレストランも、やはり洞窟でした。ワインを飲んで、絶品のピザを食べて満腹になって部屋に戻り、ロウソクの炎を眺めながら眠りにつきました。

朝、鳥の鳴き声で目を覚ますと、まだおとぎ話が続いているようでした。それからテーブルに盛り付けられた果物をかじりながら外に出てみると、再び驚愕してしまいました。昨日は夜だったので分からなかったのですが、ホテルの前は、溪谷になっていて、とんでもない絶景が広がっていたのです。

その後、地産食材の絶品朝食を終え、マネージャーのミケーレさんにお話を聞きました（名前と同じだけれど、モリーゼのミケーレさんではありません）。

昔、洞窟では動物と人間が一緒に住んでいました。それは暖をとる意味もあったのですが、衛生的に問題があるということで、一斉に退去させら

れたそうです。その後、洞窟住居は廃墟になり、街も荒廃していったそうです。しかし、オナーで哲学者のダニエル・キルグレンさんがオートバイでイタリア国内を回っていたとき、この場所を見つけ、宿として再生したそうです。ダニエルさんは、その前にも廃村になりそうだった村にアルベルゴ・ディフーズを造り、村を再生したことがありました。

ミケーレさんは「セクスタンティオ」のことを、「ここには昔、人が暮らしていたんです。つまり昔を感じる場でもあります」と語っていました。これもアルベルゴ・ディフーズの考えの一つなのでしょう。

わたしも、ここに昔の人が居たということを感じとり、なんだか方向性はちょっと違うかもしれないけれど、おとぎ話の登場人物のようになっていたかもしれません。



上／異世界にいるような気分になってしまうマテラの灯。下／眠るだけで時間旅行を楽しめるような、「セクスタティオン」の客室。



Ora del Caffè



朝起きて、部屋を出てみたら、この絶景。驚きました。



『ソット・レ・クメルセ』のレセプション町の入り口付近にあります。レセプション、部屋、レストランが分散した、まさにアルベルゴ・ディフーゾです。

まさにアルベルゴ・ディフーゾ

最後はプーリア州です。長靴の踵部分にあるロコトンドという小さな町へ向かいます。車を走らせていると、いたるところにトゥルツリが見えてきました。トゥルツリとは住居や小屋としても使われている円錐形の建物で、白い壁に石で組まれた山笠帽のような屋根があります。これはアルベロベッコという町に集中していて、世界遺産にもなっているのです、観光地として賑わっています。

しかし、そのような場所から少し離れたところにあるのがアルベルゴ・ディフーゾの特徴でもあります。別にひねくれているわけではありません、脚光を浴びずとも、土地にしっかりと根付いている良質なものを伝えるという精神があるのです。

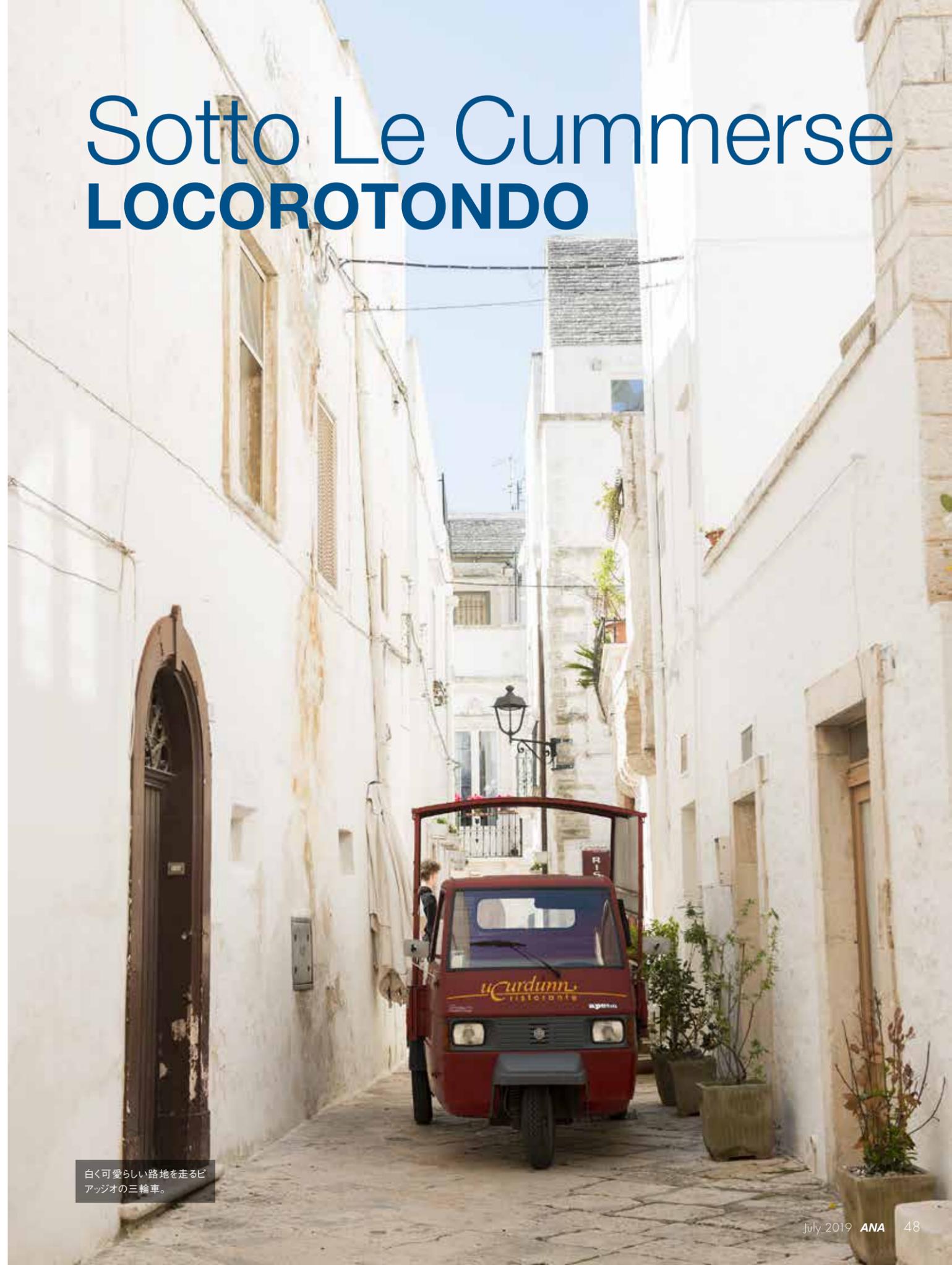
ロコトンドへはアルベロベッコから車で15分ほど。徐々に近づいて、丘の上を望むと、白いケーキのような町が見えてきました。ここにある『ソット・レ・クメルセ』は、アルベルゴ・ディフーゾの理念ののっとっている感じでした

まずは町の入り口付近にあるレセプションに行き、レストランの場所などを教えてもらいます。鍵を渡されたら、スタッフと一緒に旧市街に入っ

て、本日泊まる家に連れて行ってもらいます。旧市街には車が入れないので、荷物は後から、大きなカゴのついた自転車で運んでもらえます。

ロコトンドの旧市街は壁が真っ白で、入り組んだ路地が続き、住人の方が軒先で花を育ててい

Sotto Le Cummerse LOCOROTONDO



白く可愛い路地を走るピアッジョの三輪車。

燦々と輝く太陽の下で洗濯するのは楽しい。「今日も乾きがいいよ」とおばあちゃん。

Buona giornata!



イタリアへの翼

南イタリアへは東京(羽田)からANA便でフランクフルト、ミュンヘンなどへ。他社便に乗り換えて、ナポリへ。

いぬい・あきと

作家。パフォーマンス集団「鉄割アルパトロスケット」主宰。2013年「すっぽん心中」(新潮社)で川端康成文学賞受賞。『のろい男 俳優・亀岡拓次』(文藝春秋)で野間文芸新人賞受賞。最新作は『ゼンマイ』(集英社)。



チェックインすると、細い路地をカゴ付き自転車で荷物を運んでくれます。

で、路地を彩っています。なんだか歩いているだけでも楽しくなってきました。わたしの泊まる家は、そんな路地の途中にありました。階段をあがった2階の部屋は、清潔でこぢんまりとしていて、キッチンもあります。エスプレッソマシンが置いてあったので、クッキーを食べながら、エスプレッ

ソを淹れ、バルコニーから外を眺めていたら、時間がゆっくりと流れていくようでした。夕食どきになり、予約していた、アルベルゴ・デイフーズが経営するレストランへ向かいます。ここは郷土料理を出すところで、お肉が美味しくて、地元産のすっきりしたワインも置いてあります。満腹になり幸福を感じながら、ほろ酔い気分での夜の路地を歩いていたら、随分前から自分がここに住んでいるかのような錯覚に陥ってきました。地域密着型のアルベルゴ・デイフーズは、こちらの心にもなにかが密着してくるようです。翌日、オーナーのタニアさんに話を聞きました。十数年前のロコロトンドは人口も減り、空き家も多くなっていったそうです。しかし、食べ物や景色、雰囲気、町の魅力はじゅうぶんありました。だから人が少なくなっていくのはとても寂しい出来事でした。そこで不動産業をしていたお父様が、



白が眩しいロコロトンドの町は、丘の上にあります。

空き家を改修して泊まれるようにしたのが『ソット・レ・クメルセ』のはじまりだそうです。やはり郷土を愛する心があればこそそのアルベルゴ・デイフーズなのです。そして、その心が旅でやってきた人の心に響き、幸せな気分させてくれるのでした。

ロコロトンド散歩

PM 6:00

アルベルゴ・デイフーズが経営しているレストランで夕食。



調理の手際に惚れ惚れします。



AM 7:30

朝食は歩いて1分のところ、宿が経営するカフェでいただきます。

朝から食べすぎるほど美味しいんです。

AM 9:00

オーナーさんに教えてもらったアドリア海沿岸の町へ。



美しい入り江で毎日焼けています。



PM 3:00

アルベルゴでトルコ見物してロコロトンドに戻り、町をくまなく歩きます。

オーナーさん(中央)とスタッフの皆さん。

PM 9:00

昨夜とは、非別のレストランで夕食。お肉が美味しいです。



ほろ酔いで夜の散歩が最高です。